

人物相関図



ストーリー

プロローグ Prologo

フン族の王アッティラは、アクイレイアを征服した。





オダベッラ
父よ……
私は忘れない。

祖国を滅ぼされ、
復讐だけを抱いて
生きる女。
オダベッラ。

アッティラは捕虜とな
った女戦士オダベッラ
と出会う。

彼女は父の仇を討つ決
意を秘めていた。

ローマの将軍エツイオ
は、イタリアを譲るな
ら同盟を結ぼうと持ち
かける。

しかしアッティラは、
激しく拒絶する。



エツイオ

世界を
分け合おう。

アッティラ

ローマは、
我が手で、
滅ぼす。



フォレスト

ここから、
新しい世界を
始めるのだ。

滅びの中から、
未来を探そうとする
者もいた。

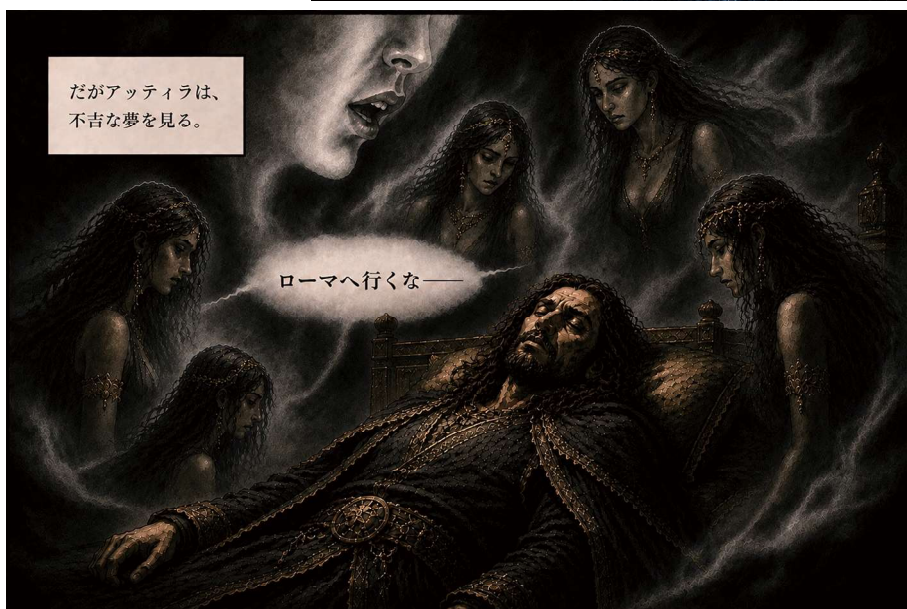
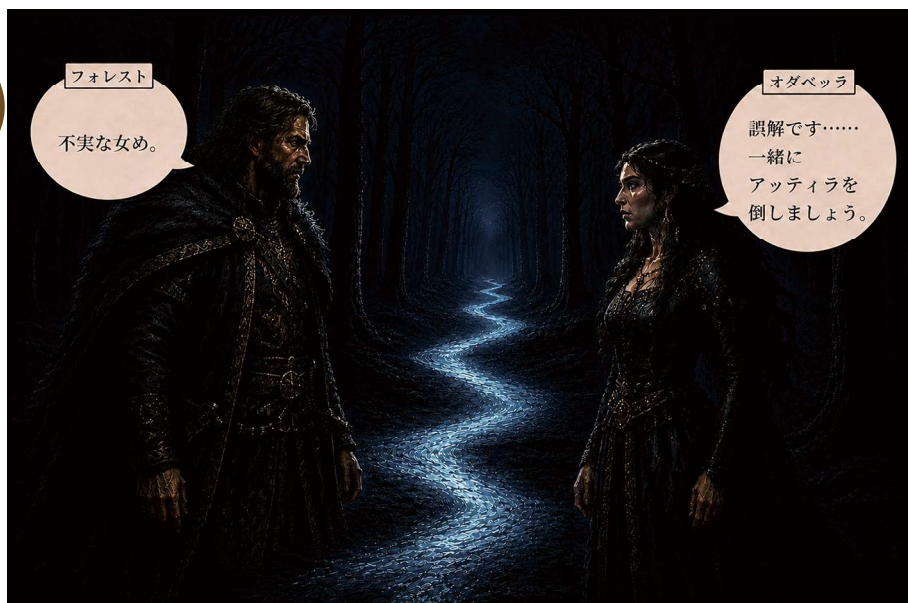
一方、フォレストは恋
人オダベッラを案じな
がら、祖国再興を誓う。

第1幕

Act I

オダベツラと再会したフォレストは、彼女が敵に従ったと思い怒る。

しかしオダベツラは、復讐の機会を狙っているのだと明かし、二人は和解する。



その頃アッティラは、「ローマへ行くな」という不気味な夢に怯えていた。

出陣を決意するが、民衆を率いる老人レオーネが夢と同じ言葉を口にすると、恐怖に震えて跪く。フォレストたちは祖国勝利の兆しを確信する。

第2幕

Act II

エツィオは、皇帝がアッティラと休戦したことに憤っていた。

そこへ潜入していたフォレストが現れ、アッティラ暗殺計画を打ち明ける。





神官たち

山から
亡霊が叫んでいます！

だがその時、
風が来る。
世界そのものが、
彼らを拒むようだった。

祝宴の席では、神官たちがアッティラに危険を警告するが、彼は意に介さない。

嵐の混乱の中、フォレストは毒でアッティラを殺そうとするが、オダベツラがこれを阻止する。

怒るアッティラの前にフォレストが名乗り出るが、オダベツラがフォレストを処罰すると申し出ると、アッティラは彼女を王妃に迎えると宣言する。三人はそれぞれ復讐を誓う。

第3幕

Act III

アッティラとオダベツラの婚礼の日。フォレストは彼女の裏切りを疑いながら、アッティラ襲撃の機会を待っていた。

そこへオダベツラが現れ弁明するが、フォレストは耳を貸さない。さらにエツィオも加わり、三人が集う場へアッティラが現れる。



オダベツラ

ああ父上！

復讐は全うされた。

背後からローマ軍の関の音が響く中、ついに復讐の時が訪れる。オダベツラは父の仇としてアッティラを短剣で刺し殺し、勝利の凱歌のうちに幕が下りる。

—— 復讐は果たされた。しかし滝だけは、すべてを見続けていた。
そして人間たちの物語のあとに残るのは、「世界そのもの」である。

演出ノート / まだ神が近かった時代

人間がまだ「理屈」よりも、「気配」や「神意」に近い場所で生きていた時代の感覚に、ふと触れることがあります。

今回の《アッティラ》で描きたいのは、単なる歴史劇ではありません。

ローマ帝国の衰退。蛮族の侵攻。文明の崩壊。そうした歴史の出来事の奥にある、「失われていく神話の時代」そのものです。

ヴェルディ初期作品である《アッティラ》には、後年の心理劇とは異なる、巨大で原始的な力が流れています。

火。森。血。祈り。予兆。

人間たちは、自らの意志だけで生きているのではなく、自然や運命の大きな流れの中に生きている。その感覚を、今回の演出では舞台上に立ち上げたいと考えました。

アッティラという人物も、単純な暴君としては描いていません。

彼は文明以前の力を背負った存在です。森の王。部族の王。火と獣の王。

一方でローマ側もまた、秩序と文明を代表しながら、同時に衰退と疲弊を抱えています。

つまりこの作品で対立しているのは、「文明」と「野蛮」ではありません。そこにあるのは、古い神々の時代が終わり、新しい時代へと移り変わっていく世界そのものです。


女性合唱の場面では、月光のような音楽の中に、古代の祭祀を思わせる空気が流れることを意図しました。

《アッティラ》という作品は、歴史劇でありながら、どこか神話の入口に立っています。そして最後に残るのは、滝です。

この滝は単なる風景ではありません。人間たちの復讐、権力、欲望、愛憎を、ただ黙って見続けている「世界そのもの」の象徴です。ある意味では、人間の物語を超えた場所に存在する、「神そのもの」のような存在かもしれません。

最後、舞台にはひとつの「御神体」だけが残る。

今回の上演で、その「まだ神が近かった時代」の記憶を、現代の劇場にほんの一瞬だけ立ち上げることができればと思っています。



まだ神が、
人間の近くに
いた時代の物語。